第5章 なぜ嘘をついてはいけないのか？［カントとベンサム］

突然ですが、あなたは嘘をついたことはありますか？

もちろんありますよね。「私は嘘をついたことはない」などと言う人は、まさにその瞬間に嘘をついているに違いありません。

でも、私たちは「ウソをつくな」「正直であれ」と教えられて育ちました。子どもの頃には、ワシントン少年が桜の木を切り倒してしまったことを正直に告白して褒められたなどという逸話を聞かされて素直に感動したはずです。なのに、気づいたら、私たちは軽い良心の痛みを抱えつつ、無数の小さな（？）嘘を積み重ねて大人になっていました。

なぜ私たちは嘘をついてしまうのでしょうか？

もちろん、心の弱さや小さなプライドのために嘘をついてしまうことは多いでしょう。でもそれだけでしょうか。私たちは心のどこかで、**場合によっては嘘が許される**、と思っているのではないでしょうか。

たとえば身内が重いガンに冒されてしまったようなケースを考えてください。こうした場

合に、正直に真実を告知するべきかどうかというのは非常に難しい問題です。近年では告知するケースが増えているようですが、場合によっては病気と戦う気持ちを損なってしまい、かえって病状が悪化する可能性もあります。こうした場合には「絶対に治るよ！」と小さな嘘をついて励ましたほうがいいかもしれないのです。

ところがこうした「便宜的な嘘」をいっさい認めない哲学者がいます。それがカントです。

回 カントの道徳論

イマヌエル・カント（1724-1804）（図16）は、プロイセン王国の中心都市ケーニヒスベルク（今日ではロシア連邦領のカリーニングラード）で生まれ、ほとんど街を一歩も出ることなく、大学教授として波乱のない生涯を送った哲学者です。彼の生きた18世紀のヨーロッパは戦争が絶えず、街全体がロシアに占領されたこともありました。そのような激動期を生きたにもかかわらず、カントの人生に

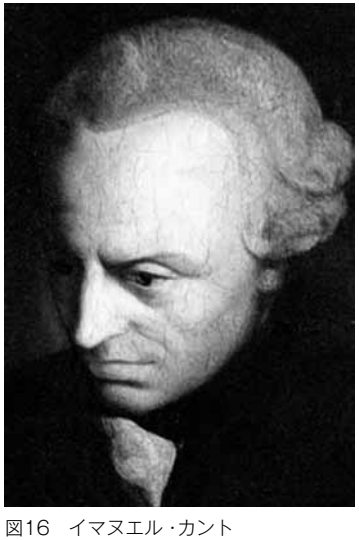

図16　イマヌエル・カント

回 なぜ言語が大事なのか？

さて、ウィトゲンシュタイン自身の哲学を見る前に、言語が20世紀における哲学の主役となった事情について説明しましょう。

なぜ言語は哲学の主役になったのか？

ひとことで言えば、認識論を含めたあらゆる**哲学は、言語を通して語られるほかない**からです。認識論は、客観的な世界と主観的な意識内容との関係を問題にします（図47）。でも、その「主観的な意識内容」とはどのようなものなのでしょうか？　主観的な意識内容は、本質的に私秘的（個人的）なものです。他人の心は逆立ちしても覗くことができないからです。したがって、私秘的な意識内容は、言語という形で語られない限り、それについて議論することさえできないのです。私たちは認識について論じたいときであっても、言語を用いざるを得ないのです。

とはいえ、言語がもし意識内容に形を与えるための透明のフィルターのようなものだとすれば、ことさらに言語について哲学的な検討を加える必要性はないでしょう。でも、言語は

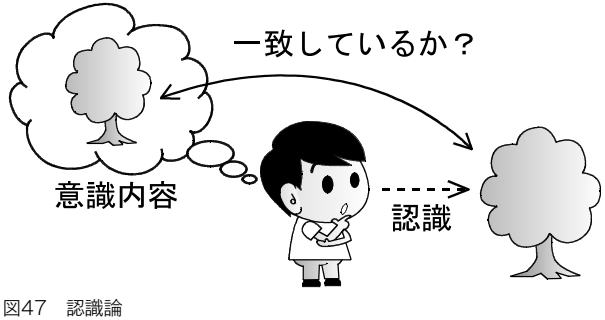

図47　認識論

透明のフィルターなどではないのです。これこそが言語が哲学の主役となった第二の理由なのですが、私たちは**言語によって思考している**のです。

「言語によって思考する」とは、次のようなことです。

私たちは一般に、まず意識内容があって、それが言語によって表現される、と考えがちです。つまり、言語は意識内容に貼り付けられるラベルのようなものだ、というイメージです。でも、その場合のラベルが貼り付けられる以前の「意識内容」とはどのようなものなのでしょうか？　たとえば「集団的自衛権」といった概念について、言語を使わずに意識することはおそらく不可能でしょう。ものごとを考えるためには、事柄を分析し、分節化しなくてはなりません（たとえば「侵略」と「自衛」を区別し、「個別的」と「集団的」を区別する）。そしてそのためには、言語を用いなくてはならないはずです。つまり、**私たちは世界を言語によって分節化している**のです。

このように、私たちは言語を通して思考しています。というわけで、ものごとを根源的に探求する学問たる哲学は、まずは言語の根本的性格について探究することになったのです。これが言語論的転回です。